

# 言語能力を育成する国語科授業づくり

— 言語特性に着目した読みの指導をとおして —

吉田 裕久 難波 博孝 木下美和子 青山 之典  
立石 泰之 永松 陽子

## I. はじめに（研究の背景と課題）

子どもたちに、文章・作品を読む力をつけたい——PIISA調査によってわが国の子どもたちの「読解力」の低下が指摘されて以来、「情報の取り出し」に終わらない、「解釈・熟考・評価」に関わる読みの能力を高める授業の工夫・改善が求められるようになってきた。

一方、学習指導要領が改訂され（平成20年3月）、国語科に大きく関わる事項として、「国語力」（文化審議会答申、平成16年2月）改め「思考力・判断力・表現力等」（中央教育審議会答申、平成20年1月）を育成するために、「各教科等における言語活動の充実」が強調されている。

これらに共通するのは、読む対象（何を読むのか）として、文章・作品（何が書かれているか）、そして書き手（作者・筆者は何を言いたいのか）だけでなく、他ならぬ読み手自身（私がどう思い、どう考えるか）が問われているということであろう。

本研究も、こうした今日的な問題意識を共有しながら、そして何よりも学習者の実態を配慮し、「言語特性に着目」して読みの授業を展開しようとするものである。

- 1年生——お話（物語文）に取り組み、話の結論部分を予想する活動を通して、登場人物の言動・気持ちを読み取る
- 2年生——詩に取り組み、まず自分の読みを大切に、次いで友だちの読みを重ねることによって、作者が伝えたいことを読み取る
- 5年生——説明文に取り組み、疑問をもとに筋道を確かめながら筆者の言いたいことをつかみ、筆者の述べ方、自分にとっての有用性を読み取る
- 6年生——古典（古文）に取り組み、自分と作者の

もの見方を比較することを通して古典教材に親しむ（興味・関心を持つ）

以上の取り組みを通して、それぞれ言語特性に着目した読みの指導を展開することにより、児童全員に確実に読む力を育成しようとする。その授業のあり方について、実践を通して、以下に提案したい。

## II. 研究の目的・方法

本研究は、児童の言語能力を育成するため、言語のもっている特性に着目した国語科の授業づくり研究を行う。本年度は、読みの領域に限定して、授業づくりの段階で具体的な方途を示すことを目的とする。

その方法は、言語特性に着目して教材の持つ価値を明らかにし、読みの授業を通して実践的に分析・考察を行う。実践研究を踏まえて、課題を明らかにし、修正を図りながら教育課程の見直しを図りより良い教育課程を編成する。実践を積み重ねながら、言語特性を構成しているもの、指導の方途など理論の構築を図る。

## III. 検証授業

### A 読む力を育成する授業づくり

— 「ショッピング・バスケット」（第1学年） —

#### 1 本実践の仮説

児童は、入学時より聞き手参加型の（聞き手が話し手の言葉や動作などをくり返して言う）読み聞かせを楽しんでいる。「大きなかぶ」の学習後、語句や展開において繰り返しがある作品を見つけ友達と紹介しあっている。詩や短いお話はすぐに暗唱する。だが、お話の大体を話す時、暗唱したことを生かしてまると話し、大体をとらえること・登場人物の人物設定等をとらえることには課題がある。

児童は、お話を読む際、無意識のうちに自分の経験を生かして読み進めている。無意識の言語活動を意識

化された児童の言語経験に置き換えることによって、読みの力が育成できると考える。意識化され読み取った内容を友だちと交流し確かめる。自分の言語経験にない言葉に出合った時、もう一度教材を読み直し、意味のとらえなおしや確認を意識的にし、読みの再構築を図る。児童の意識化された読みの経験を積み重ねることにより、自立した読み手を育成できるのではない。

本単元全体では、展開を予想する際、意識的に登場人物の人物設定を押さえて読む力を育成したい。

教材「ショッピング・バスケット」は、結末部分に読者の予想と違う結果がある。結末部分を予想させる仕掛けは、人物設定にある。人物の言動の中から人物設定がなされている言葉を押さえて読む必要性を学ぶことができる。児童は簡単なお使いを依頼された経験があり自分の経験と重ねて読み進めると予想される。結末部分を、経験から予想を立てる児童、読者としての違和感を持ちながら読み進める児童などがある。教材文との比較は児童自身の読み方が意識化され、教材文との差異をもとに、人物の設定を読む必然性を認識する。お話を読む際、人物の設定・登場人物の言動を押さえて展開を予想する力を育成したい。

そこで、本研究の仮説を以下のように設定した。

お話の大体をつかみ結末部分を自分の経験を元に予想し、教材との違いに着目すれば、登場人物の言動を読み取る必要性を認識するであろう。

## 2 検証の方法と視点

- 結末部分の予想と教材の差異を、児童の発言やワークシート・ビデオテープで記録し①児童の言語経験の意識化②読みの意識化について、検証。

## 3 授業の計画（全8時間）

第1次 お話の世界を楽しもう（6）

- ・ 本文を読みお話の大体をとらえよう…………… 2
- ・ 最後の部分について話し合おう（本時）…… 1
- ・ 中心人物の設定を読み取ろう…………… 3

第2次

- ・ いろいろな作品を読んで、中心人物について報告しよう。…………… 2

## 4 単元目標

- さまざまな繰り返しのあるお話の大体をとらえることができる。
- 登場人物の設定について読み取ることができる。

## 5 本時の授業展開（3／6時間目）

- ① 教材を読む。
- ② 登場人物の確認及び粗筋の確認。
- ③ 学習のめあての確認。（結末部分を予想する。）
- ④ 結末部分の予想を交流する。
- ⑤ 自分の予想との違いを教材文で確かめる。
- ⑥ 予想と教材文の関係について考える。
- ⑦ 続き話を考える。

## 6 考察

- ① 児童の言語経験を意識化させる。

お使いを果たした主人公に対して依頼者の母親がどのような態度であるかについて話し合いをした。

叱られるという児童が32名、叱られないが8名いた。叱られる理由は、不足品がある（自分の経験を根拠に）、帰るのが遅い（本文の設定より）ためのどちらかであると考えた。

叱られない理由は、出会った困難から身を守るため生じた不足品である（道徳的価値判断）から、不足品は仕方がない。無事帰ってきたことを評価してくれる（経験）、不足品について正直に話せば叱られない（経験）、と考えた。以上のことは、この作品の結末部分が、児童の経験を持ち出すことができ、無意識を意識化させることを可能にした。

- ② 意識化されたものを確かめる。

結末部分を児童に渡し、読み終わると、一瞬、何だという表情になり、叱られた訳について集団思考した。その結果、母親のお使いを主人公に依頼した際「ひとつばしり」を読んでいなかったことに気がつき、設定を読む必要性を理解した。その後児童は物語の展開に不満を持って授業を終えた。

## 7 成果と課題

本実践において、結末部分を予想する学習は児童の登場人物の設定を読む必然性を生み出すことができた。学習後、児童は自主的に言い訳を続き話で書き教材に対する不満足を解消した。次時、児童が獲得した人物の設定を読む必然性をもとに学習に臨ませ登場人物の言動を押さえて読む力を育成すると同時に、設定された人物像と言動を見直すなど意識化された読みの力を継続して育成したい。（木下美和子）

## B 読みの深まりを認識させる詩の授業づくり

—「雨のうた」（第2学年）—

### 1 本実践の仮説

2年生を対象にして単元「詩を読もう」を構想するにあたり、次のような仮説を立てた。

読み取ったことがらについての話し合い活動を活発に行えば、個々の児童の読みが深化したり、言葉を大切にしながら詩を読んだりすることができるようになるであろう。

詩の学習において、音読や暗唱はしっかりできて、詩の内容や作者が伝えたいことは何かということも考えられているのに、新たな詩を読んだとき、自分なりに解釈することができないことがある。また、表現方法の工夫を見つけることはできているのに、ことばにこだわって読むことができていないこともある。

詩とは、吟味、精選されたことばによって作者の感動やものの見方、考え方を伝えようとするものであり、それがゆえに、一つ一つのことばにこめた作者の思いは大きい。また、作者の思いや考えが短い表現形式に込められているだけに、字面だけでは見えてこないものもある。その見えない、言わば隠れたものをつかんでいくことが詩を読むうえでの大きな楽しみでもあるのに、学習活動がそこまで至っていないこともある。

実際、本学級の児童も詩を音読したり、暗唱したりすることは好きである。声の強弱をつけたり、読み取ったことを動作で表したりすることも一人一人ができるようになってきた。しかし、詩にこめられている作者の思いまでを読み取っている児童は少ない。

そこで、児童には、詩に出合ったときに、まず自分の中でうまれた思いを大切にさせ、その後、友だちとの話し合いをする中で、自分が思ってもいなかったことに気付かせたり、作者が伝えたいことにせまらせたりしたい。さらには、そのことの積み重ねをとおして、ものの見方がいろいろできるような児童を育てたいと考え、上のような仮説を立てた。

## 2 検証の方法

仮説を検証するための方法は次のようである。

- ① 詩の初読段階の〈読み〉を書きとめさせる。
- ② 初読段階の〈読み〉を交流させる。その際、児童だけでは気づかないであろう、読み深めの観点を発問として示す。
- ③ 話し合い活動の結果、新たになった個々の読みを書きとめて、読みの深まりを認識させる。

## 3 検証授業の計画

### (1) 本単元の目標

- 詩への興味をもち、自分の考えをもちながら詩を読むことができる。
- 話し合いをとおして読み深め、その深まりを認

識することができる。

- 話し合ったことをもとに、別の作品でも自分の考えをもつことができる。

### (2) 指導計画（全4時間扱い）

第1時 鶴見正夫作「雨のうた」の詩を読んで話し合う（本時）

第2時 自分だけの「雨のうた」の詩をつくる

第3時 雨を題材にした他の詩を読んで話し合う

第4時 これまでの学習をふりかえる

## 4 授業の実際と考察

ここで報告するのは、指導計画の第1時である。

本時ではまず児童に「雨のうた」という題名を示し、そのイメージを発表させることによって本作品への興味をもたせた。その後、提示された作品全体を実際に読んだときの疑問や発見を自由に述べさせた。

その話し合いのなかで、二つの大きな疑問（『あめはひとりじゃうたえない』とはどういうことだろう』『あめはだれともなかよし』とはどういうことだろう）に焦点をあてて考えさせた。

検証の方法として挙げた手だてによって、個々の児童の読みの深化や言葉を大切にしながら読もうとする姿勢は、学習の振り返りとして書かせた次のような記述に見てとることができる。

（前略）友だちの意見を聞いて、「あれー？本当かな。」「ああ、そうだ。」そして、考えるべく。たしかにそうだと思う人がたくさん出てきました。

また、ものの見方の変化についても、

（前略）ぼくは、「ぼくよりも、ものにあたる音を知っているのかもしれない。」と思いました。なので、こんど雨がふったら聞いて、雨にまけないくらい音をしってみたくなりました。

という記述に見えるように、言葉との関わり（ここでは、雨音を表す擬音語）をとおしての自然認識を意識している姿を窺うことができる。

児童の考えを十分に集約するには至らなかったものの、「雨は、何か物に当たって初めて音が出ること」「それ（雨音）が『うた』と表現されていること」、また、「当たる物によってその『うた』が同じではないこと」が共通理解された。ただ、「うたわない」ではなく「うたえない」と表現されていることと「あめはだれともなかよし」を関連させて考えさせると、さらに多

様な考えが出たと思われる。

今後の課題として、読みの深まりを認識させる方法をさらに探ることや、読み取ったことをどう表現させるか（音読など）を考えている。（永松 陽子）

### C 読者の疑問をもとに文章の筋道を確認しながら読む授業づくり

#### 「インスタント食品とわたしたちの生活」（第5学年）

##### 1 本実践の仮説

今、国語科における説明的文章の読みでは活用が重視されつつあるが、解釈不在のまま、内容の取り出しと活用とが目指されているようである。これまでの説明的文章の読みの指導が、情報の取り出しに終始してきたという課題を克服するためには、解釈を大切に評価へと進む指導が求められる。多様な情報が溢れている今、情報を吟味し、選択できる読者を育てることが求められているからである。

読者は疑問を明らかにするために読むのが自然である。通読では理解できなかった部分について、筋道を意識しつつ、自らの生活経験、知識、価値観と比べて理解していく。要旨が解釈できたら、そこで終わらず、筆者の説明のわかりやすさと自らにとっての有用さとを吟味することへと進ませたい。

以上の考えのもとに、次のような仮説を設定した。

読者の疑問をもとに文章の筋道を確認しながら読ませることで、読者は解釈を生み出し、説明のわかりやすさと有用さを判断できるだろう。

本実践で扱った教材であるが、内容的に本学級の児童の好奇心をくすぐるものである。インスタント食品は時々食べる程度だという児童が多く、インスタント食品について詳しくは知らないと考えられるからである。また、筆者は、インスタント食品の特長と問題点の双方を根拠として主張を述べており、その中立的な姿勢は児童にとって参考になるであろう。しかし、根拠として示されている内容には妥当性を欠く部分もあり、吟味の対象としても扱えるだろう。

##### 2 検証授業の計画

###### (1) 本単元の目標

- 疑問をもとに筋道を確認しながら読むことができる。

###### (2) 指導計画（全7時間扱い）

- ① 題名読みを通して、筋道を予想した後、全文を通読して文章の大まかな構成をつかみ、わかりにくい

部分を見出す。……………1時間

- ② 疑問点を明らかにするために解釈を進め、説明の仕方を吟味する。……………5時間（本時 2/5）

- ③ 学習の中でつかんだ、テキストの解釈および吟味の結果をまとめる。……………1時間

###### (3) 本時の目標

- インスタント食品の味や香りに対する筆者の判断の仕方について、筋道を確認しながら考えることができる。

###### (4) 本時の学習過程

- ① 疑問をもとに第8段落の内容（インスタント食品の味や香りの説明）を読み、学習課題を設定する。
- ② 第8段落の第1文を解釈し、「インスタント食品が家庭で手をかけて作る料理とあまり変わらない味や香りがある」という筆者の判断をつかむ。
- ③ 筆者の判断の仕方について話し合い、考えたことをワークシートに書く。

##### 3 検証授業の実際

「インスタント食品には、家庭料理と味や香りが似たものもあるが、そうでないものもあり、筆者の判断に疑問が残る」という児童の疑問を切り口にして学習を始めた。この疑問に対しての意見を出し合い、学習課題を設定することを目指したが、十分なことはできなかった。そこで、結局、上記の児童の疑問をもとに読みを進めることにした。

まず、筆者の判断について、意見の交流をもとにして、ワークシートには次のような解釈が多く書かれていた。

- 干し飯などの昔の物よりは、家庭料理と味や香りが似ていると考えた。文中の「似ている」とは、そのような意味で使われているのだと思う。

干し飯などと比較して判断していることについては、ほとんどの児童が把握していたといえる。

次に、そのような筆者の判断の仕方については吟味の対象になると考え、検討を進めたが、干し飯と比べれば似ているという判断の仕方は納得できるという評価が多かった。そうなった原因は、干し飯などについてあまり知らなかったこと、および、本時の授業において該当部分の筋道に限定して検討したために、本時に扱った部分が文章全体の筋道を構成するのにどのような効果をもっていたかを検討しにくかったことであろうと考える。今後の課題としたい。

ただし、次のような評価をする児童が若干いた。

○ 確かに昔と比べたらかなり味や香りも似てきたけど、全部が全部似ているわけじゃないのに、筆者が言い切っているのがよくわからない。

疑問を解決する過程で、具体的なインスタント食品（インスタントのコーヒーやラーメン等）を事例として取り上げて考えたので、似ている場合と似ていない場合があるという知識をもとに、筆者の判断について吟味し、評価したのだろうと考えられる。具体的な事例をもとに考えることが、文章を吟味し評価するための足場になる可能性を示している。

#### 4 考察

本実践では、読者の疑問をもとに解釈を進めさせ、評価へと進ませる読みの過程を求めた。文章全体の筋道をどのように手がかりにさせるか、学習過程の面から考える必要がある。また、読者の知識をどのように解釈に生かすかも考えたい。（青山 之典）

#### D 古典に親しむ授業づくり

##### — 「枕草子」(第6学年) —

#### 1 児童にとっての古典を学ぶおもしろさ

昨今、日本語のひびきやリズムを味わわせようと、古典を声に出して読む活動がよく行われている。しかし、児童は古典を学ぶ意義や楽しさを感じることができているだろうか。古典は、長い年月の中で人々に愛読されてきた文学作品である。物語と同様に、作品に見える人間の真実や書き手のものの見方を読み取っていくだけでなく、当時と現代との生活様式や価値観等の共通点・差異点を読み取っていくこともまた児童にとって古典文学を読む楽しさの一つであると考える。

#### 2 教材選定の理由

本単元では、「枕草子」の第一段（東京書籍6年下）を取り扱う。本作品は、四季それぞれの趣深い情景について清少納言独自の鋭い感性と文体で表現されたものである。本作品を教材として選定した理由は、まず本作品が、千年以上も前に書き記された随筆であるという点である。千年の時を経ても、四季の風情に対する日本人の感覚には共通する点がある一方で、読み手はその生活様式の違いや清少納言の鋭い感性から生まれる風情の感じ方の違いに驚かされるだろう。

次に、季節の趣や風情について描かれているという点である。現代の生活に慣れている児童にとって個々の季節における風情を意識して生活することは少ない

だろう。本単元で学習することをとおして、児童には改めて自らの季節感や風情に対する意識について見つめさせたい。

#### 3 研究の仮説

児童には一つの読み物として古典と出会わせたい。そして、一人の読者として作者のものの見方と比較し、対峙させることで、作者のものの見方や感じ方に気づかせていきたい。そこで、情景を想像させようとして、音読・暗唱にも取り組ませていきたい。そうすることで、時代を超えて人々に愛される古典文学のおもしろさに気づかせることができるのではないかと考えた。そこで、本研究では、次のような仮説を設定した。

古典教材のことばをもとに想像した情景について作者の考え方と比較する活動を設定すれば、児童はものの見方や感じ方、表現の仕方の違いに気づくとともに、古典文学を読むことのおもしろさを感じることができるとであろう。

「枕草子」の第一段を取り扱うに当たっては、授業の実施時期と児童のイメージへの共感のしやすさから、まず秋の部分を取り上げる。次に夏の部分を取り上げ、作者が風情を感じる情景を想像する中で、現代との差異点などを明確にしていきたい。

#### 4 授業のねらい

- 描かれている情景を想像することができる。
- 清少納言の四季の風情の感じ方に気づくことができる。

#### 5 指導計画（全3時間）

第1～3時

清少納言と自分の四季の風情の感じ方を比較し、現代の風情の感じ方との共通点や差異点に気づくことができる。（本時1／3）

#### 6 授業の実際

まず、秋について児童が風情を感じるものを問いかけた。児童からは、栗、落葉、秋刀魚等の意見が出された。児童に作者や作品を明かさず、千年前のその書き手（清少納言）個人は、「夕暮れ」に秋の風情を感じていることを告げると、多くの児童が意外に感じる中で、それに共感した児童が5人いた。そこで、秋の部分の本文を提示し、情景について読み取っていった。

児童に夕暮れの時間帯について問い、夕日が沈んで行く四枚の絵を提示した。多くの児童は、その経験か

ら夕日が山に隠れている途中の絵に挙手をした。そして、書き手の述べる夕暮れの時間帯について本文や訳文に注目させたところ、「山の端いと近うなりたるに」から、作者には夕日が山の端に近づいた頃からが夕暮れであり、「日入りはてて、風の音、虫の音など、はた言うべきにあらず。」から日没後も風情を感じていることを読み取っていった。その後、カラスと雁でどちらが高く飛んでいるかについても話し合い、最後に再び、書き手の感じる秋の風情に共感するかを尋ねたところ、3人であった。

「夏は夜」の部分についても同様に比較していった。夏の部分で児童と書き手の見方は大きく異なっていた。児童の多くは活気づいた夜を想像していたが、書き手が述べる夜とは、静かな夜であったことを読みとり驚いていた。

## 7 考察

本実践では、作品の情景を想像しながら自分と作者のものとの見方との比較をとおして、古典文学を読むことのおもしろさを感じさせ、古典教材に親しませることをねらいとした。学習後の児童の感想を紹介する。

千年以上前に生きた書き手は、現代の私たちと季節の風情の感じ方がちがいました。私は、「暑い、寒い」などで決めていたけど、昔の人は日の入りや時間等で決めていました。夏といえば、花火や祭りなど活気づいた夜だと思ったけど、昔の人は静かな夜を夏だと思っていました。やっぱり昔と今では見方がちがうのだなあと思いました。

古典文学を読むことのおもしろさを感じさせる点については一定の有効性が認められたが、課題も残る。各発達段階における古典教材に「親しむ」児童の姿のあり方、断片的なイメージではない情景を想像させる手立て、音読・暗唱との関連のさせ方等の究明が必要であると考えます。(立石 泰之)

## IV おわりに (成果と課題, 展望)

本研究は、児童の実態に即し、児童の言語能力を育成するため、言語のもっている特性に着目した国語科の、読みの授業づくり研究を行ったものである。そこで、本研究の成果と課題を以下の観点で明らかにしたい。

- (1) 児童の実態を的確に把握できたか
- (2) 教材の言語特性に着目した教材研究ができたか
- (3) 目標とした言語能力をつけさせられたか

### (1) に関して

各学年の、児童の課題をどうとらえているかをみる。1年では、「大体をとらえること・登場人物の人物設定等をとらえることには課題がある」2年では「詩にこめられている作者の思いまでを読み取っている児童は少ない」とし、5年では説明的文章の授業の課題としてであるが「情報の取り出しに終始してきた」ととらえ、6年では「児童は古典を学ぶ意義や楽しさを感じることができているだろうか」と疑問の形で示している。

このようにそれぞれの実践者が児童の実態(の課題)述べてはいるが、実践者の主観のみに止まっている。今後は、児童の課題について、他の教員の観察やその他のリソースから多角的にとらえる必要があるだろう。

### (2) に関して

1年では、翻訳絵本という特性を活かし、日本の子どもたちにとっては意外な結末を有する物語構造であることをふまえた上で、また絵を持つという特性を活かし、絵によって大体をつかませる授業を構想している。

2年では、リズム感のある詩であるという特性を活かし、群読風の音読を授業に取り入れつつ、音読にとどまらず、詩がさまざまな読みを許容するという特性を活かして、解釈の深化拡充を図る授業を構想している。

5年では、対比的なレトリックを使いながら、根拠から主張へとながれていく論理をもつ教材であるという特性を活かし、筆者の意図を解釈しつつ吟味を図るという授業を構想している。

6年では、現在にも共通する題材をとりあげつつそこにこめられた趣は現在(あるいは学習者)とは異なる独自の視点を持つ古典随筆という特性を活かし、学習者の思いと対比させながら筆者の情をとらえる授業を構想している。

このように、どの学年も教材の特性を活かした授業を構想している。

### (3) に関して

(2)と比べ、(3)については、目標として言語能力がついたかどうかの検証が弱いと言わざるを得ない。もちろん本研究における単元だけで実現することは不可能だろうが、この単元で達成できた水準をどのように示していくか、また継続的にとりくみにどのようにつないでいくかが今後の課題だろう。

(難波 博孝)